半世紀の歴史を刻む はなぶさ会と陶交会

説明板の除幕式
（泉山磁石場）

はなぶさ会の記念誌

陶交会の記念誌

有田町歴史民俗資料館と道を隔てて北側にそびえる山を英山（はなぶさやま）とよびます。享保16年（1731）に書かれた『皿山雀』という書物には英山を花房山と表記し、「岩の風情が屏々として、峯は開いた花のように見えるので、このような名前をつけたと思われる」と説明しています。

ついでに、山の中腹に木立の茂った所を鷹鳥といい、昔人家もなかった頃、鷹が巣をかけたのでこう言い伝えたのだろうとも記しています。

伊万里･腰岳から続く黒髪山系の南端が英山ですが、見る方角によっては全く異なった顔をのぞかせます。当館から見る姿は鋭く切り立った岩山で、人をも近づけないほど雄々しく、見る人の目をひきつけます。

陶器市を間近に控えた平成19年4月19日（木）、はなぶさ会創立50周年を記念して、当館に隣接する磁器の原料地・泉山磁石場の展望所で、陶板による磁石場の説明板除幕式が行われました。

これまでも、30周年には有田ダム湖畔に黒髪山の大蛇退治の伝説を描いた陶板を、また40周年には磁器製の大太鼓を製作し、それぞれ有田町や陶山神社に寄贈されています。

はなぶさ会は、有田地区に居住する陶磁器商社の若手経営者で組織され、会員相互の和睦を通して、有田焼の研究、販売、仕入れなどに関する情報交換や討論を行い、あわせて共同事業あるいは業界発展の一助となすことを目的に、昭和33年に発足しています。初代会長には中ノ原の犬塚誠次さんが就任し、現在の会長は25代目の篠原賢次さんです。

このはなぶさ会という名称は英山にちなんだものです。はなぶさ会は今まで10年ごとにその歩みを記録してきました。当館は昭和37年発行の「はなぶさ会」創刊号を所蔵しています。その中に発足のころの思い出として犬塚誠次さんは次のように書いています。

「終戦後２、３年も経った頃かと思うが、有田陶磁器商人の青壮年部会を作ってはという声があり、岡田常七氏（肥前陶磁器商工組合専務）辺りの助言もあり20数名で結成したが、その後立ち消えとなり（中略）、３年ばかり前再び青壮年会設立の話が持ち上がり、前の轍を踏まないように慎重に何回も発起人会を開催し在り方を研究討議した」とあります。最も審議を重ねたのは会の名称だったそうで、最後まで有力だったのが「甚六会」。ただ、親睦を目的とするとはいえ、対外的に活動することも多いので、そういう場合に「甚六」では支障をきたすということで、最終的に有田の山のシンボルともいえる英山をひらがなで書いて「はなぶさ会」と決定した経緯も書かれています。

はなぶさ会が商業者、販売を生業とするグループであるとすれば、それと対をなすのが工業者、製造を主とする陶交会です。陶交会ははなぶさ会に先んずること５年前、昭和28年に結成されたものです。それ以前にあった旧東有田町の「窯焼青年会」と、旧有田町の「一陶会」が一つになって結成されました。初代会長に中島政司さんが就任し、発足当時の会員数は15名。当初は技術的な交流を目的とし、月一回佐賀県窯業試験場でのデザイン開発や各先進地や市場の視察研修などを行い、昭和60年からは九州陶磁文化館で年一回の展示会が開催されています。

過去、商工業者の歴史は利害関係もあって対立する立場でした。反面、それぞれモノづくりの立場で、あるいはモノうりの立場で会員相互が意識を高め、研鑽を重ねてきたグループでもあります。これからも二つの会が切磋琢磨しあう活動は、有田焼の質と名声を高めていくものと期待しています。　（尾﨑葉子）

季刊 皿山 No.74 夏 2007
有田町歴史民俗資料館・館報

海に沈んだ有田焼

やきもののように重たくてかさばるものを大量に遠くへ運ぶためには、船が使われました。有田焼も伊万里港まで陸路で運ばれた後は、船に載せられて運ばれました。しかし、いつも目的地に無事に辿り着くとは限りません。不幸にも途中で何らかの理由によって遭難し、海に沈むことも少なくありませんでした。それらは今も海底に沈んでいます。

福岡県の北部に位置する岡垣海岸ではこれまで大量のやきものが砂浜に打ち上げられています（写真１）。古いものでは12世紀頃の中国の青磁碗などもありますが、多くは有田焼や波佐見焼など佐賀県や長崎県の江戸時代のやきものです。

地元の収集家の添田征止さんは30年近く、毎日のようにこの海岸に通い、収集されています（写真２）。もちろん破片が多いのですが、全く割れていないものも少なくなく、種類も碗、皿、小坏、鉢、仏飯器、蕎麦猪口、蓋物、香炉、瓶、紅皿など大半の器種を網羅しており、添田さんのご自宅はさながらやきもの屋のようです。

どうしてこんなにやきものが打ち上げられるのか、考えてみました。やきものの年代をみてみますと、17世紀のものはほとんどありません。そして、まとまった数が見られるのは18世紀前半以降の製品で、特に18世紀後半から19世紀前半にかけて大量に見られます。この年代のかたよりを見ると、これらのやきものは岡垣町の隣町の芦屋商人の活動と関わりがあるように思えます。つまり、やきものの年代は芦屋商人が盛んに活動を行った時期と合致するのです。

芦屋はかつて芦屋千軒とうたわれ栄えた町で筑前商人の本拠地の一つでした。筑前商人は江戸時代の中期以降、伊万里で有田焼などのやきものを仕入れ、「旅行（たびゆき）」と称して、全国津々浦々に売りさばいていました。『伊万里歳時記』には天保年間頃、伊万里から積み出された約31万俵のやきものの内、約20万俵を筑前商人が扱ったと記されています。細かい数字の信憑性はともかく莫大な量のやきものを筑前商人が扱っていたことは確かです。芦屋町内にある岡湊神社や神武天皇社には伊万里の陶器商人が寄進した石灯籠が今も残り、その関わりの深さをうかがわせます。

芦屋商人が盛んに活動していた頃、やきものを積んだ船が数多く芦屋に出入りしました。船が出入りする分、沈んだ船や積荷が多くなったのでしょう。

写真１　芦屋港と岡垣海岸
写真中央が芦屋港、その左奥の弧状の砂浜が芦屋・岡垣海岸。

写真２　岡垣海岸採集のやきもの（添田征止氏所蔵）
岡垣海岸に打ち上げられた江戸後期の染付段重。

写真３　芦屋沖海底遺跡の海底写真（山本祐司氏撮影）
水深23mの海底で発見された染付蓋。これまで付近から100点以上のやきものが見つかっている。

そして、浜にやきものが寄せられるのであれば、その沖合にも沈んでいるはずです。実際に昔、100点ほど有田焼や志田焼が海底で発見されています。そこで３年

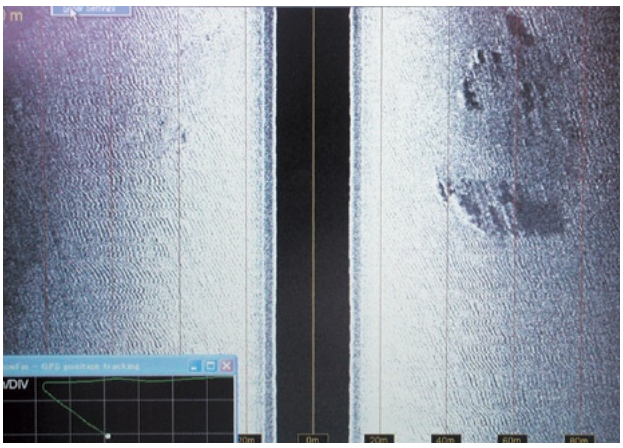


写真４　サイドスキャンソナーによる海底画像
サイドスキャンソナーが捉えた海底の砂紋と岩礁（右上）。左下の別枠は航跡図。

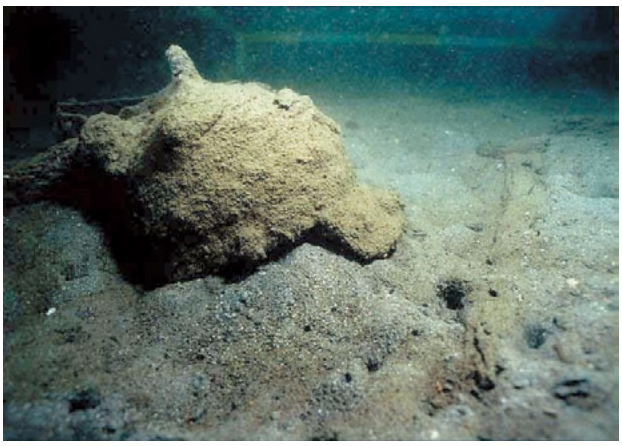


写真５　鷹島海底遺跡の鉄製兜（提供：松浦市教育委員会）
元寇の島、鷹島では海底から元軍ゆかりの品々が数多く発見されている。

写真６　鷹島海底遺跡の唐津焼（提供：松浦市教育委員会）
17 世紀初頭の唐津焼。まだ有田が陶器をたくさん焼いていたころの製品。

ほど前に実際に潜ってみました。地元ではナカテとよんでいる海底の岩礁です。水深は 23 メートルです。ビルの高さで言えば７階建てぐらいです。台風の通過直後に潜ったため、近くの遠賀川からかなり土砂が流れ込んでいたようで、あまり透明度はよくありませんでしたが、それでも海底でやきものをいくつか発見しました（写真３）。現在、この海域で引き揚げられたやきものは芦屋町の歴史民俗資料館で展示されています。

さらにこの海域の海底の状況を探り、沈没船を見つけるために、今年の３月にアジア水中考古学研究所と東京海洋大学が共同で、サイドスキャンソナーによる探査を行いました。サイドスキャンソナーは音波を出して、その反射の強弱から海底の形状を捉える探査機器です（写真４）。沈没したタイタニック号や戦艦大和の発見にも大きな効果を発揮した機器です。まだ海底の映像の解析はこれからですが、今後の調査につながる発見が期待されています。

一方、筑前商人の本拠地の海に大量に沈んでいるのであれば、有田焼の積出し港であった伊万里湾の付近にもさぞかし沈んでいるだろうと思うのですが、残念ながら有田焼の発見例は多くありません。

伊万里湾の付近と言えば、世界の海難史上最悪の遭難が 700 年以上前にありました。元寇の際、いわゆる「神風」が吹いて、鷹島に集結していた元軍が壊滅したと言われています。沈んだ船は数千とも伝えられていますが、正確なところはわかりません。

この鷹島海底遺跡では元軍の船の隔壁などの部材、鎧や兜、刀剣、「てつはう」などの武具、青磁碗や褐釉壺などのやきものなどが多数出土しています（写真５）。そして、それら元軍関連の遺物とは別に唐津焼や有田焼が見つかることがあります（写真６）。ただし、岡垣海岸やナカテのようにまとまった数ではありません。沈没した積荷の一部なのかもしれませんが、船で使っていたものなのかもしれません。ちなみに鷹島海底遺跡では縄文土器や弥生土器も出土します。

有田焼は日本の海だけに沈んだのではありません。17 世紀後半から 18 世紀にかけて大量の有田焼が海外に運ばれていきました。そして、東南アジアの海でも沈み、インド洋でも南アフリカ沖でも沈みました。遠くヨーロッパの北欧の海からも引揚げられています。世界の海に沈んだ有田焼についてはまた別の機会を見つけてご紹介したいと思います。　　（野上　建紀）

（資料に関する問い合わせ先）
芦屋歴史の里（歴史民俗資料館）
〒 807-0141　福岡県遠賀郡芦屋町山鹿 1200 番地
TEL　093-222-2555
松浦市立鷹島歴史民俗資料館
〒 859-4303　長崎県松浦市鷹島町神崎免 146
TEL　0956-48-2744

未来に伝える文化遺産
〈有田町の文化財〉紹介

龍泉寺　過去帳

新しい有田町が船出して１年が過ぎましたが、皆様のまわりにはどんな変化があったでしょうか。隣同士であっても知らないことが数多くあったと思います。

過去の人々から次世代へのメッセージともいえる数多くの時代の証言者（物）を、現在のわたしたちは文化財と総称していますが、貴重な歴史資料であるとともに、町にとって共有の文化遺産でもあります。

これからシリーズで、それら町の宝ものを紹介していきたいと思います。第一回目は有田焼の陶祖として名高い初代金ヶ江三兵衛（李参平）の過去帳です。

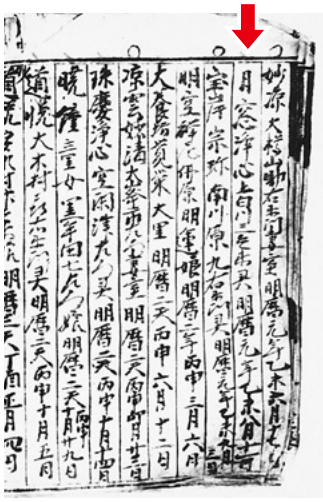
初代金ヶ江三兵衛の墓碑は昭和37年、白川在住の智者礼一さんによって発見されました。それまでは子孫である稗古場の金ヶ江家でも、その存在はわかっていませんでした。

その後、同42年に泉山の有田町文化財保護審議委員・池田忠一さんによって大木・龍泉寺の過去帳の中に墓碑と同じ戒名が発見され、墓碑も初代のものであることが実証されました。同47年にはその一部が町の重要文化財に指定されました。

過去帳には「月窓浄心　上白川三兵衛霊　明暦元年乙未八月十一日」と書かれています。

同寺の過去帳は最も古いものは寛永21年(1644)から始まり、大木や広瀬など旧西有田町の集落はもちろん、大樽、白川や応法、黒牟田など旧有田町の地名を持つ人々も数多く記録されています。

その人となりを伝える資料はほとんどありませんが、朝鮮半島から連れてこられ、言葉も風習も全く異なる社会の中で泉山の陶石を発見し、磁器焼成の指導的立場となった初代金ヶ江三兵衛。戒名から類推すると、風流を解し、閑雅な心の持ち主だったものと思われます。



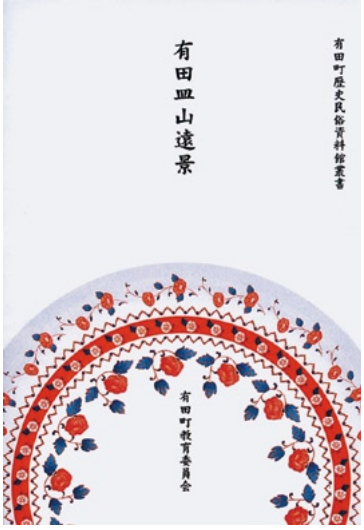
龍泉寺過去帳の一部

・所在地：有田町大木
　　龍泉寺所蔵
・内　容：有田町重要
　　文化財

●新刊紹介●

このたび「有田皿山遠景　有田町歴史民俗資料館叢書」を発行しました。

現在までに当館では平成元年に「皿山なぜなぜ」、同10年に「おんなの有田皿山さんぽ史」などを発行しています。これらは有田皿山の歴史を楽しく、面白い読み物として紹介することを目的としていますが、「なぜなぜ」はすでに初版以来９版を重ね、「さんぽ史」も2000部を発行するなど、教育委員会が出版する書籍としてはまれな発行部数であり、好評を得ていると自負しています。



今回の「有田皿山遠景」は、明治から昭和にかけて皿山で活躍した人物や当時の風俗などを紹介しています。楽しく読んでいただける内容となっていますので、ぜひお求め下さい。

・書　　名　「有田皿山遠景
　　有田町歴史民俗資料館叢書」
・価　　格　定価　1800 円（税込み）
・販売場所　泉山　有田町歴史民俗資料館東館
　　大樽　有田陶磁美術館

※詳細は当館（電話 43 － 2678）までお問い合わせ下さい。

〈濃み筆のつぶやき〉

もうお気づきでしょうか。今回から紙面がカラーになりました。

これからも、町民のみなさまに有田の歴史や新しい史実などをわかりやすく、楽しくお伝えしていこうと思いますので、ご支援のほどよろしくお願いします。（葉）

季 刊『皿 山』

通巻 74 号（平成 19 年6月 1 日）
編集・発行　有田町歴史民俗資料館

〒 844-0001　佐賀県西松浦郡有田町泉山 1 丁目 4-1
☎ 0955-43-2678　FAX0955-43-4185